金属音が、喧しく廊下に響いた。
「おい、ネズミはどこに行った」
「そっちを捜せ、七番通路も見て来い！」
慌ただしい中、足音と金属音が重なり合う。
銃器を持った人間が建物の中を捜索しているのだ。彼らは皆、一様に焦りに駆り立てられた表情をして、殺気立っていた。
「畜生……どこにいやがる！　早く出てこねえと頭ぶっ飛ばすぞ！」
銃器を持った男たちのひとりが、目の前の扉を開こうとした。そのとき――――

「こんちゃーす、便利屋でぇーす!!」

若い男性の、軽い声がした。
同時に、観音開きの扉が、男を跳ね飛ばすように蹴破られた。
「ぐあっ、がっ」
思わず、銃器を持った男はもんどり打って倒れる。なんとか気を確かにして、入ってきた男性の方を見た。
そこには、眼鏡をかけ、東洋風の衣装に三つ編みといういでたちの男性が――この街に根差す便利屋がいた。男には、彼の名前に思い当たる。そうだ、彼はこの街きっての便利屋――
「李……閏斗」
「あーら、名前、憶えてくれちゃって。嬉しいことこの上ねーわ。とりあえず、お届けもんがあるんだけど」
「な、くそっ、表の奴等は、見張りはどうしたんだ！　なんで便利屋がここにいる!?」
「その〈見張り〉ってのはこいつらのことか」
困惑する男に、何人かの人間がぶつけられた。
「ぐあっ」
起き上がりかけていた男は、再び地を這うことになった。おまけに、身体を強かに打ってしまった。起き上がるのに時間がかかるだろう。
「てことで、お届けもんでしたっ。サインなら要らないぜ」
大の男を三人もぶん投げられる怪力にも覚えがある。銀色の髪に紅い瞳。確実に、便利屋のもう一人だ。
「ひゅーぅ。ルイズってばやるじゃん。さすが俺の相棒」
「褒めるのは後だ。ちゃっちゃと片すぞ」
「おいおい、褒められて嬉しくねえのかよ、ルイズ・クリスターニャさんよぉ」
「今のところ嬉しくないな」

「何で？」
「そりゃあ」
言葉にしたそのとき、ルイズの腹が大きく鳴った。
「腹が減っているからに決まってるだろう！」
「おあー。やっぱりかー」
「閨斗。仕留めるぞ」
「おっけい！」
瞬間――――閨斗の愛機、DIOが文字通り火を噴いた。
ばちり、という独特の錬成音。炎が空気を唸らせる声。そして人間の方へ向かった炎は、容赦なく男たちを焼いた。
「はぁーっはっはっは！　どうだよ、この新しい錬成クォーツは！」
轟々と音を立てて、炎は燃え上がる。
「ひ、ひぃっ」
「助けてくれぇ」
熱からなんとか逃げ出したものが数人、閨斗の視界の端にちらついた。
「右だ」
短い指示に戸惑うことなく、ルイズは閨斗の傍をすり抜けて炎がすぐそこに迫る部屋の中を効率よく駆けた。
「ぎゃっ」
「ぐえっ」
一人目は、大きなサバイバルナイフを使って右手の銃を手首ごと落とし、そのまま下へ引いて大きく転倒させながら喉笛へナイフを拳とともに打ち付けた。
二人目は左前方へ逃げようとした。それを計算していたルイズは、右手に残るナイフを二人目の首もと、頚椎の辺りに投げつけた。そのままうつ伏せに倒れ込んだ二人目の頚椎を、ナイフの上から踏みつけた。
動こうとしてももう動かない、死体になりつつある二人を放って、ルイズは細かい人数を効率よく、閨斗は大きく部屋の中を確実に、それぞれ攻撃を続けた。

＊＊＊＊＊

「あーあーあ。なんかもうなんか。なーんかなー」
「何だ、閨斗。何か文句でもあるのか」
「いやいや、文句ぅ？」
非常に不機嫌そうな閨斗は、縄で縛り上げた上で床に座らせている、この集団の長に蹴りを

入れた。
「あるに決まってんだろうがよ！　何で俺がたったの十万ゲルトでクォーツを七個も使わなきゃなんねーんだよ！　意外としぶといんだよ、この××××××どもがッ！　F××××× !!」
「ひぃい、や、やめっ」
何度も閨斗は、長をDIOで小突く。その様子を見て、ルイズは「ガラ悪ッ」と呟いた。
閨斗には聞こえなかったようで、まだDIOで長の頭を小突き続けていた。
「閨斗、その辺にしておけ」
「あー？　あー」
「捜索して殲滅するまでが契約だ。早くしろ」
「へいへいっと」
言いながら、二人は各部屋を見て回る。大方、片付いた頃に閨斗とルイズは再び長がいる場所で落ち合った。
「あー畜生。何でこんなことしなきゃなんねーんだよ、本当。十万ゲルト。十万ゲルトぽっちだぞ？　あのハゲ、しつこく値切ってきた上にこんなやべぇ仕事、押し付けやがって……」
「もういいだろう。やめておけ」
「あぁ？　これが文句、言わないでいられるかってんだ」
「まあそうなんだがな」
「ん、なんかあんのか」
「ああ。閨斗、この仕事の契約、どうなっていた？」
ルイズは、嫌な笑みを浮かべ閨斗を見る。それに疑問を持ちながら、閨斗はルイズの問に応える。
「この施設ン中の全員をとっちめて、所長を生け捕りにしておけ。だろ。十万ゲルトの、十万ゲルトぽっちの、な！」
十万ゲルト、十万ゲルト、と何度も喚く閨斗に、ルイズは人差し指を立てて言う。
「なら、そっちの部屋にあるものは、おれたちの好きにしていいってことだよな」
「あ？　まあ、火事場泥棒ってのは俺らの常套手段だな」
「ちょっと来い」
閨斗は、ルイズが探した方の部屋へ連れていかれる。先導したルイズが扉を開くと、
「うおあああああああああああああああッ !!」
金庫の中に、大量の札束、金の延べ棒、その他にも無造作に貴金属が入っていた。大きな金庫は部屋の大部分を占めており、中のものの価値を計算すれば、相当な額になるだろう。
「これは契約の内に、入っていないからおれたちのものだ」

「ひ……ひ……」
「ひ？」
ひひっ、ひひっ、と閏斗が引き攣るように何度か喉を鳴らし笑う。次の瞬間、閏斗は大きく飛び跳ねた。
「ひゃあっはあああああああああ!!　金だ金だアァ！」
ぴょんぴょん、と閏斗が跳ねて踊る。次いで、金品に近づこうとする。
「はしゃぐのはいいが、気を付けろよ。さっきその辺で――」
「うぼあぁッ」
血だまりと死体の腕に、閏斗はつまづいてしまった。
「一匹、殺ったから」
「遅い……さっさと言えよ、ルイズ・クリスターニャ！」
「うるさい。先走るお前が悪い」
「ああ、ちくしょー。最後の最後でカッコワル。ま、とりあえずかき集めますか」
ルイズはそのあたりにあったぼろきれを使い、再構築錬成を行って大き目のずだ袋を二枚作った。
「ほれ、集めろ」
「ん」
その後、手際よく二人は辺りに散らばる金品を、絶妙にばれない程度に頂いてから施設を後にした。
「おし、これでいいな」
「ああ。当面、飯に困らない」
「お前はまたそれだな。この食いしん坊め」
「オマエの飯が美味いから仕方ないだろ」
「はっはっは！　褒めても何も出ないぞー」
二人は、視線を合わせた。そのまま、「にっ」といたずらっぽく笑って、『いつもの台詞』を口に出す。
「「We Did It!」」
後ろの方から警備ギルドの警笛が聞こえた。暗闇の中を、便利屋は駆け抜けていった。

【了】
【2800 文字】